言語化のための思考整理
―思考の区画化に関する提案―

Ruben Polo-Sherk　（広島大学[院]）

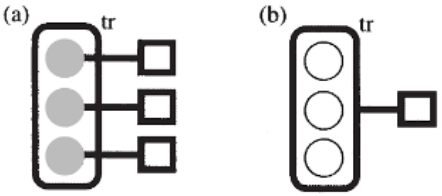
1　はじめに

日本語では(1a)が普通であるが、英語では(1c)に対応する(1b)のように表現し、(1a)に対応する(1d)のような表現は容認されない。

(1) a. クッキーを美味しく焼く
　　b. Bake tasty cookies
　　c. 美味しいクッキーを焼く
　　d. *Tastily bake cookies

もちろん、「美味しい（く）」が「焼く」と「クッキー」のどちらを修飾するかということは、単なる構文上の問題ではないため、認知レベルにおける差異にも注目しなければならない。言語表現の表す情報（内容）を心的整理することに関しては、いくつかの理論が提案されてきた。例えば、Langacker (1997, 2000)は、別個の要素が組み合わさって一つのユニットとして機能するという grouping に関する提案を行っている。異なる grouping のパターンは例えば複雑な関係が表されている(2)に見られる。Grouping は統語の構造化ではなく、概念の構造化に関するものであり、統語形式に一致する必要はない（(2a, b)は形式上区別されない）。また、(3)のように、グループ化されたものが統語上分離している場合もある。

(2) a. Those women are intelligent.
　　b. The problems with that idea are numerous.
　　(Langacker 2009b: 50)



(3) The headway that we managed to make…　(Langacker 2000:157)

また、Chafe (1977, 2005)・Croft (2007)のモデルでも、事態は把握される際に参与する要素に分けられる（これを固体化という）としている。例えば、(4)のように、把握の仕方によって、異なる固体化が生じる。これも上記の grouping と同じ課題設定となっている。

(4) he passes a girl on a bicycle / you see both of them converging (Croft 2007:356)

しかしながら、これらの分析では異なった集合化の結果である複数の表現が(1)のようにほぼ同じ意味を表すようになるという現象を説明することはできない。たしかに、grouping は事態把握に重要な役割を果たすが、思考と言語表現の情報の整理という脳内現象を扱うために必要な一般化がなされていない。

2　提案

そこで、本研究では、区画化(compartmentalization)という新たな概念を提案したい。区画化とは、言語使用者の表したい情報の区切り方・整理・構造化のことを指し、思考を言語化するプロセスの一部でもあり、かつ、表現の構造の属性でもある。また、区画化の差異は捉え方の差異に関係しており、当該言語で表現することを可能にするための区画化が事態を把握する際にもある種の圧力として働く（c.f. Slobin 1996）。つまり、言語使用者は当該言語に合う形に思考を区画化するのである。したがって、ほぼ同じ意味を表すにもかかわらず異なった区画化構造を持つ表現には、言語の思考整理への影響が見られると考えられる。以下では、区画化のパターンに関わる 3 つの現象について議論する。

2.1　相対偏移

相対偏移とは、ある情報に相当する表現が異なる構造上の位置に置かれることである。例えば、(5a)では否定辞は「いる」にかかるが、(5b)では one にかかるのは相対偏移の例である。(1)もこのパターンの例である。

(5) a. ここに誰もいない
　　b. No one is here.

2.2　相対分裂・圧縮

ある表現では少数の要素として表現される概念が、別の表現では多数の要素として表現されることがある。このような場合に起こっているのが相対分裂・圧縮である。語彙的には、例えば、(6)では、英語の *reluctance* と *unwillingness* の 2 語で表されている概念が日本語では「不本意」という 1 語で表されていることから、2 つの要素が単一の要素に圧縮されていると考えられる。このことは、逆に、日本語では 1 語で表される概念が英語では 2 語に分裂していることになる。

(6) a. Her reluctance or unwillingness
　　b. 彼女の不本意

また、構文レベルでは、Talmy の類型論(Talmy 2000)や「移動」の概念が構文と語彙のどちらからもたらされるのかといった議論(Goldberg 1995; Langacker 2009a)によく用いられる(5)のような事例は、本研究では、相対分裂・圧縮と相対偏移の問題として分析される。スペイン語の *entro* と *flotando* の 2 語が *floated* の 1 語に対応しているため相対分裂・圧縮の現象であるが、移動の情報がどのように言語化されるのかという点では相対偏移の問題になる。

(5) a. La botella　entró　a　la cueva flotando. (Talmy 2000:49)
　　the bottle moved-in to the cave　floating
　　b. The bottle floated into the cave.

文法要素に関しても区画化は見られる。例えば、(6a)では、テンスはイ形容詞の語尾変化にコード化されており、copula にはコード化されていない。それに対し、(6b)では copula がテンスを表し、形容詞にはテンスがない。興味深いことに、ナ形容詞の場合(7)は、英語と同じコード化を行っている。

(6) a. 美味しかったです (lit. '(It) is was-tasty')
　　b. It was tasty
(7) a. 明確です
　　b. 明確でした

通言語的に見ても、同様な現象が多様な場合に見られる。例えば、フランス語の(8)は(6)に似ているが、ここでは copula が明らかにテンスをコード化する（分詞はアスペクトをコード化する）。また、ラテン語の(9)のような動詞などの語形変化が人称を表し主語が個別の要素として言語化されない場合に動詞が主語を「含む」という分析ができる。

(8) Je {suis/serai/etc.} allé　(lit. 'I {am/will be/etc.} gone' = 'I {went/have gone}'/'I will have gone')
(9) Damnatus sum　(lit. 'I-am was-condemned')

区画化は negative concord/polarity にも当てはまる。(10a)のスペイン語の例では、否定の情報は 2 か所に分かれており、このことは、(10b)においても同様である（全然＋ない）。また、明示的な否定がない(10c)も同様の現象であると考えられる。通常、「全然」は否定を必要とする（c.f. *全然忙しい）。そのため、(10c)の「大丈夫」には、否定の情報が入っている内在構造があるという分析が可能と考えられる。

(10) a. No hay nadie aquí.　(lit. 'there-is-not no-one here')
　　b. 全然忙しくない
　　c. 全然大丈夫

2.3　根本的再構成

共通点を持たない根本からの再構成もある。例えば、(11b)は(11a)の根本的再構成であるといえる。もちろん、(11b)は否定表現(11a)とは区画化が異なっているため、(11c)のように negative polarity としては機能しない。

(11) a. これは私の専門ではない　(Yamanashi 2000:246)
　　b. これは私の専門外である　(ibid.)
　　c.*これは全然私の専門外である　(ibid.:253)

話者が利用できる言語要素・構造によって、概念の構造化が決まる。つまり、ほぼ同意の表現の場合でも、ただ単に整理の仕方を変えただけで全く同じ情報を表しているということはなく、概念の中身自体も異なるのである。以下は表現される情報が明らかに異なる例である。(12a)に相当するスペイン語(12b)は異なった区画化構造を持つが、情報自体は比較的類似するものである。一方、日本語の(12c)の情報は大きく異なる。また、(13a)の英語の *more* は日本語の「もっと」におおよそ相当し、両言語ともこの部分に関しては区画化構造もだいたい類似するものとなっているが、*less* には対応する日本語がないため、言語化されるものが根本的に異なる。同様に、(14)の「～もいる/ある」構文と *some* ～ 構文は翻訳としてかなり適切と思えるが、区画化の面については相対的に根本的再構成といえる。また、「同意」の表現の区画化構造は多種多様である。

(12) a. I'm thirsty
b. Tengo sed (lit. 'I-have thirst')
c. 喉が渇いた
(13) a. more/less
b. もっと/?
(14) a. 地球は平らと思っている<u>人もいる</u> (lit. 'There are also people who...')
b. <u>Some people</u> think the earth is flat

3 本研究の意義

これまで、語彙化のパターンはカテゴリー化の問題として説明されることが多かった(c.f. Chafe 1977, 2005; Croft 2007; Langacker 1987, 2009a など)。しかしながら、Langacker (2009a)が提案しているような、表現したい概念 X と言語要素 Y の関係についての類型は、カテゴリー化の問題とは言えないような「X と Y は種・類関係にはないが、概念的に近い」「X は Y+Z に近い」「X は Y-Z に近い」などのケースを考慮していない。しかも、表現を構築するプロセスにおいて、語彙要素などは通常単独に選ばれるのではなく、総合的に選ばれるのである。それゆえ、言語化に関しては，カテゴリー化の直接的なマッピングを仮定するだけでなく、思考をどのような様式で区画化するかという観点からも検討する必要がある。そして、このように仮定すると、語彙と文法もこの観点から統一的に扱うことができるようになる（これが望ましいと考えられる理由について、c.f. Langacker 1990:115-116; Croft 2007:344-346)。以上、思考の区画化についての議論を通して、言語により表したいものの区画化構造が決まると提案した。

参考文献

Chafe, W. (1977). Creativity in verbalization and its implications for the nature of stored knowledge. In Freedle, Roy (ed.), *Discourse Production and Comprehension*. Norwood, NJ: Ablex, 41-55.

Chafe, W. (2005). The relation of grammar to thought. In Butler, Christopher, Maria de los Angeles Gomez-Gonzalez, and Susana Doval-Suarez (eds.), *The Dynamics of Language Use: Functional and Contrastive Perspectives*. Amsterdam: John Benjamins, 57-78.

Croft, W. (2007). The origins of grammar in the verbalization of experience. *Cognitive Linguistics* 18-3, 339-382.

Goldberg, A. (1995). *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.

Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, vol. I: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, R. W. (1990). *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, R. W. (1997). Constituency, dependency, and conceptual grouping. *Cognitive Linguistics* 8-1, 1-32.

Langacker, R. W. (2000) *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, R. W. (2009a). Constructions and constructional meaning. *New directions in cognitive linguistics*, 225-267.

Langacker, R. W. (2009b) *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Slobin, D. (1996). From “thought and language” to “thinking for speaking”. In Gumperz, J., and Levinson, C. (eds.), *Rethinking linguistic relativity*. Cambridge: Cambridge University Press.

Talmy, L. (2000). *Toward a Cognitive Semantics, vol. 1: Concept Structuring Systems*. Cambridge, MA: MIT Press.

Yamanashi, M. (2000). Negative Inference, Space Construal, and Grammaticalization. In Horn, Laurence, and Kato, Yasuhiko, (eds.) *Negation and Polarity*. Oxford: Oxford University Press.